

イーブルなごや・フェスティバル2015 特別講演会 <概要>

笑って考えるジェンダー論 ～家庭のこと・仕事のこと・未来のこと～

講師：瀬地山 角 氏（東京大学教授）

日時：平成27年6月26日（金）13:30～15:30 会場：イーブルなごや 3F ホール



「子どもを産む」のは生物学的性差ですが、「子どもを育てる」のは社会的性差（ジェンダー）であり、「子育てをするのは圧倒的に女性」というのは日本の社会の中で人

が作ってきたことに過ぎません。人が決めたことであれば、人と人が相談して変えることができます。それがジェンダーの概念の重要なポイントです。

これからの日本は高齢社会になって働く人が減り、支えられる方が増えるので、働く人を増やす政策が必要になりますが、日本の社会で可能性のある労働力は、高齢者、専業主婦、外国人の三つしかありません。

高齢者に関しては、「60代は現役」という社会をつくらなければなりません。高齢者の就業率が高い県は医療費が少ないという傾向もあり、日本の高齢者は働く意欲があって、働くことを良しとする文化もあるので、もっと高齢者の就業が進んで良いはずですが。

専業主婦に関しては、実は男性の家事・育児時間の少なさが問題です。父親が家事・育児を「手伝う」という固定的な性役割分業の考え方から、子育てのコストが女性にのみかかるように見えてしまい、企業側が男性の労働力の方を安いと思って女性の雇用を敬遠するような社会になると、社会の再生産が不可能になり、日本全体が子育てのできない社会になってしまいます。そうならないように男性も家事・育児に携わるべきです。

逆に言うと、夫だけが働く一頭立て馬車体制は高度成長期の遺物であり、少子高齢社会はそれでは回らないので、妻も働く二頭立てにしなければなりません。日本の女性正社員の平均年収を約350万円とすると、夫が残業をせずに帰宅して家事を分担し、妻がフルタイムで就労した場合、年間所得が350万

円増えることになります。言い換えると、フルタイムで働き続けた場合に生涯賃金が2億円になる女性が、出産と同時に正社員の職を辞めると1～2億円のマイナスになるわけです。

もはや男性の稼ぎだけで家計が成立する時代ではありません。20代～40代の男性の死因のトップは自殺ですが、これは一頭立て馬車の重荷が男性の命を縮めている可能性があります。「優しくって頼りがいのある人」が女性に人気があるそうですが、優しい人＝自分の意見を聞いてくれる人を選ぶなら、相談して物事を決めることを選択しているわけですから、そこには責任が伴うことを女性も分かってほしいと思います。このようにして、男性側も肩の荷を下ろしていくことが必要です。

1999年6月に男女共同参画社会基本法ができましたが、その前文には「性別にかかわらず」とあり、異質平等論を否定しています。仕事を性別で区切る必要は何もありません。しかし、その考え方はまだ浸透しておらず、男女の賃金格差や、女性の高等教育への進学率の低さ等から、日本は国際的に異常な後進国となっています。これでは、国際社会で発言力を持ってません。

これからは、男女共同参画の観点から、少子高齢化に合わせた、皆で働く新しい社会を創っていかねばならないのです。

※要約の関係上、随所にあつたお笑いの箇所は割愛しました。

（文責：イーブルなごや指定管理者アイ・コニックグループ）

